

【第5回松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会 発言録】

(敬称略)

開催日時 平成平成30年4月26日(木) 午後1時30分から午後4時まで  
場 所 松本市立博物館2階講堂  
出席者 松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会  
菊池健策委員、後藤芳孝専門員、櫻井多美江専門員、笹本正治委員、  
関悟志専門員  
乃村工藝社(設計JV)  
稲垣プランニング担当主任技術者  
事務局(松本市立博物館)  
木下館長、中原課長、船坂課長補佐、三木主査、遠藤主任、堀井主任、  
千賀主任、高山主事、岡野囑託、

1 部会長あいさつ

菊池：昨年1年間検討して参りました展示に関わる案について、まだ最終決定はしておりませんが、建物と合わせまして基本設計案がまとまったということで、今日はそのお話を聞かせていただけることになると思います。

それから、指定文化財の取扱いに関する指針が1月の末に文化庁から新たに出されましたが、文化財の公開について非常に緩やかになったように見えていて実はよく見ると細かいところで照明の照度を何ルクス以下に落とせとこれまで明確にいわれていなかったのが文書の中に書き込まれてしまい、文化財の種別ごとにかなり細かい数字が示されておりますので、たぶん新しく作る博物館にとっても照明をどうするかというのを注意していかないと文化財が展示できないということになりかねませんので、そういったところも含めて建物と展示のすり合わせをより一層していかなければならないと思います。

今後とも皆様のご意見をいただいて進めて参りたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

2 議題(1) 基本設計について

事務局：(説明)

菊池：これは展示室の入口の手前ですよね。もし、人が滞留したらどうするか心配です。もう1つは屋根の傾斜はこんな感じですか。

事務局：そうです。

笹本：一番は雪の処理です。

事務局：雪は必ず落とさないということで。隣地に近いということと、南側は歩道がありますので絶対に落とせません。

後 藤：融かすということ？

事務局：ヒーターを入れてそのまま置いておきます。ツララを発生させないということ。

菊 池：屋根にヒーターが入ることによって収蔵庫や展示室の湿度は変わらないですか。

事務局：その部分で直接設計者に確認をとっていないので確認するようにします。

菊 池：そうすると外光が直接入ってくるのはこの部分だけですね。

事務局：そうですね。ガラスがないので。

笹 本：屋根のここはどうになりましたか？要するに、いまのうちの館の状況を見ていると直接過ぎて温度管理するのが難しくなっています。屋根に直接いつているから。

事務局：天井が貼られていない？うちも天井を張らずに・・・。

笹 本：いま菊池さんが言ったのは、結局この中の温度管理の問題をどういう形でやっていくのかなと思うんです。

事務局：収蔵庫については、魔法瓶構造で天井を貼ってこの構造の中で、ということなので恒温恒湿を担保していきます。展示空間の中では、例えば、宝船ですとか高い位置にある展示物でこの建築構造を活かした展示をぜひしていきたいということで、天井を貼らないことを考えています。いまの状態ですと建築構造の折板が折れたような状態です。

笹 本：要するに常設展の方に重文とか重要なものが上ってくることはないということ？

事務局：基本的には露出で出すということはありません、展示ケースの中に入れるので。当然天井を貼っていないので全体は高温高湿にはなります。

笹 本：中心的な特別展というのは真ん中だよな。

事務局：そうです。まさに先生のご指摘というのが文化庁の方でもされていて、ここも恒温恒湿でやろうとしていたら、ものすごい光熱費になるということなのでそれは現実的じゃないよね、というところまではお話をいただいております。ですので次回も具体的にどう展示をしていくかということまで指導を仰いで来ようと思っています。

後 藤：非常の場合の人の動線は？

事務局：建築基準法上で避難距離は決まっています。ここの階段に至るまでの距離が40m以内と定められていますので、それ以下になるようにはなっています。

後 藤：中にいる人たちはどういう形で動いていくの？

事務局：ここが非常階段①②になります。ここが特別展示室で3階が常設展示になるんですけれども、いまのところ一番遠い距離で32.5mこちらで36.4mということでどちらも40m以内ということになっています。当然、非常用照明も付きますし、この中の内装材についても準不燃材以

上ということになっています。

それから、防火区画ということで煙が上がらないように防火シャッターというようなものを設けますので、避難については問題ないと思います。当然建築基準法上、計画通知というものがありますのでそれで判断をされると思います。

菊 池：この常設展示室の避難するときの非常口はどこにあるんですか？

事務局：こことここです。

笹 本：そうすると展示をするときに逃げることを想定しておかないと、このところ災害が多いから後藤さんが言ったように見ている人たちの安全をどう確保するかということが博物館として重要になってくると思います。

菊 池：展示室の床と展示ケースの配置によって真っ直ぐに走れないです。スムーズに避難できるようにしておかなければいけないですね。

笹 本：もう1つは、我々は展示そのものは見ているけれども、後藤さんに言われたように、逃げるとか違う要素を持ちながら展示を考えていかなきゃならないと思います。でも、広がってよかったよね。

事務局：1階の部分については模型を作り込んであります。ここが拡張された部分でそこが追加できたことによって、こちらにも正面が向けられるようになって。

笹 本：いままで一番人が通るこのところに対して、どういう風に導入させるのかということで、この面積では弱かったけど広げることによってだいぶイメージが違ってきて、入れやすくなるのでその意味ではすごくよかったということです。

事務局：その関係でいまこの中の部分というのを整理してきていまして、改めて後ほど説明いたしますが、講堂と子ども向け展示室が、講堂が2階にあって、子ども向け展示室が1階にあったのが逆転をさせていただいているというようなところで、そういったシャッフルもしながらいまやっています。講堂は例えば先生方に講演をしていただくなど、そういったところのアカデミックな活動もしつつ、今回塩尻市の、「えんぱーく」に視察にいったその講堂がロールバック式で椅子が片付けられるようになっていて、それがいま市民ギャラリーは通路のところを衝立を立ててやっているんですが、空間にゆとりを持たせながらイーゼルを立ててこういう講堂の空間の中でも市民の方々に使っていただくようもっと展開できるのかなと。

笹 本：ここは何人ぐらい？

事務局：150人を予定しています。このロールバックチェアで96人、ちょっと追加で椅子を出して150人までということをやっています。

菊 池：椅子はどこにしまい込むことになるんですか？

中原：それは監修者の先生にも指摘されているものですから、検討しているところですよ。

事務局：それから講堂も囲い過ぎずなるべく広がりの中で、交流学習室の方も以前はこういうような格好であったんですが、この水道のところだけで区画をしてということで、かなり自由な空間になっています。

笹本：感想だけで言うと、ここはイトインコーナーが見えるだけみたいな感じで。本来でいったら見せたいもの、導入展示の場所がある程度この部分だけじゃなくて、どういう形で博物館として見せたいのかが少し弱くなっていると思います。

菊池：結局、博物館の入口はここで変わらないんですか？

事務局：こちらにも。

笹本：こちら側から今度は入れるようになったといっても、いままでのこの造りでいうと、結局いかに博物館らしいところを見せるかというのはこちら側になりますよね。

事務局：そうですね。

菊池：お客さんはそっちから入ってくるんですかね。

事務局：バスの駐車場がこっち側にあるんですよ。

笹本：一般的に市民の人たちの入口はここでしょう？そうすると博物館のイメージとしてどうなのかと。元々ここが狭かったからこれで言っていたけどこのところで何を見せたいかによって。

菊池：メインの入口を移した方がいいのかもしれないですよ。それに伴ってこの辺の向きを考えて。受付が奥にあってこっち側すごく違和感があったんですよ。

後藤：それは私も思いました。こっちからだと思って来た人がここまで来て、またこっちに行かなきゃいけないから。

笹本：いままでとは違ってこれだけやってできるということは、逆に言っているバスの来る人というのは県外の人で、相手はここを通る市民だとするとここが入口ですね。

菊池：例えば、小学校や中学校が雨の日に見学に来てここで食べたいと言ったら使ってもいいですか？

事務局：と言うよりもこっちの交流学習室で。

笹本：もしそうだとしたらゴミとか汚さないような管理が大変です。水処理とか気にしないと。

菊池：ここの壁は何で作るんですか？

事務局：検討中ですよ。設計事務所の方はカーテン的なものを考えているようですが、こちらの方としてはある程度しっかりした壁の方で囲った方がいいんじゃないかということを行っています。

菊池：カーテンだと中の話し声が聞こえるだけじゃなくて外からの声も聞こえ

てきますね。

事務局：しっかりとした壁の方がいいんじゃないかと設計事務所に働きかけています。

笹本：いまこのところは講演をするような場所になっていますけど、ここは何人入れますか？

事務局：全体で80人が限界です。

関：道路側から見るギャラリー、いまボックス型の展示が、こちらのところですか？

事務局：そうですね。いまはこの部分とこの辺りもその予定です。

関：わざわざお城に行き来する人がこの面を通過して奥までいくのか、入口に近いところで目に付く外側からのギャラリーというものがあれば、ここにいまあるということなので。

笹本：追加されたことによって一般の人に見せることを考えられるようになった気がします。

菊池：広がってよかったけど、広がったことによって配置を考えなければ。いま出たようにそちら側を拡張したことによってメインの入口、それからイートインコーナーとかあの辺の配置を考え直すのには時間的に間に合いますか？

木下：エスカレーターを階段にとかやっているの、そこはまだ固まっていない段階です。

笹本：もしここを変えられるようであれば、相当変えていった方が見てくれる人にとってはすごく都合がいいと思います。最初にこちら側を通るときにイートインコーナーが見えて、それは博物館じゃなくてもいいわけだし。では博物館とは何なんだというのが少しでも見えるようにできたらいいなという気がします。

菊池：この部分も博物館が管理するイートインコーナーですか？

事務局：そうです。人が滞留しているという姿を見せることによって人を呼ぶということをしては考えています。

菊池：外気の管理を考えると出入口の数は多くない方がいいと思うので。広がったのはいいんだけど、いろいろ考え直すことも出てきましたね。

笹本：建物予算も変わってきますか？

木下：空間は広がったんですが床面積は変えないという考え方です。

菊池：出来上がってからの運営上に問題がないようになっていればいいと思いますけれども。

笹本：さっきの通り私たちとしては博物館の機能の1つ、一番重要なのは収蔵庫だと思っているので広がった部分があっても収蔵庫が減っていますというのだったら困るし、増えた結果として建設費が掛かって費用が少なくなるのは困るので。

菊 池：将来のことを考えると収蔵庫がパンクするのが目に見えますから将来的に収蔵庫を確保する場所を想定した方がいいんじゃないかと思います。

事務局：事務局からの説明は以上です。

菊 池：いまの事務局からの説明に対して模型を見ながらご意見をいただきましたが、ご意見ご質問等がまだございましたらお願いします。

再確認ですが、予定地が広がったことによって大名町通り、東側の部分が少し出たんですが基本的には以前から出てきた考え方と変わっていないのでしょうか、それとも変わったのでしょうか。

事務局：敷地の拡張に伴ってそうしたところの考えというのは変わっていません。

菊 池：だけど建物も設計案も検討していたときに出てきた南側のギャラリー的な壁面は動いたんですか？それも変わらないですか？

事務局：以前は南側はかなり広い面にギャラリー展示をする予定で東面はなかったんですけれども、今回東側の壁面にも入口を設けることに伴って東面にもギャラリー展示を考えています。

木 下：南は減らすということ？

事務局：減らしています。

菊 池：東面の入口のドアは1枚ですか？

事務局：南北方向から入って西に向いて入るということで風除室を設けて入るという形になっています。

菊 池：了解です。ほかに質問ご意見はありますか？

後 藤：絵が小さいのでしっかり確認できていないんですけれども、トイレの数を減らしたという話を館長から聞いたんですが大丈夫なんですか？特に3階のところは常設展示を見る人がいっぱいになった場合はある程度確保しておかないと。きれいなトイレが評判を呼ぶ時代になっていますからトイレは少し工夫しておいた方がいいんじゃないかと思います。

事務局：1階の部分については多少減らしています。その考えというのが、いままで1階だけである程度の人数をまかなえる数ということを設定していたんですが、そうではなくて建物全体の中で充足数をカウントする考えがあるんですが、それを3階までの中でクリアできるという考えの中で1階の戸数の決定をしているというところです。

後 藤：1階はこの図面だと紳士用は2つだけしかないと見ていいんですか？

事務局：そうですね。

後 藤：1階のところに2つしかないっていうのは少な過ぎるんじゃないですか。

笹 本：講堂があるので、講演の間や学校見学で来たときに殺到するということがあるので本当に大丈夫なのかと思います。

中 原：奥の西側の図書館の前にもトイレがありますので1階は2カ所あります。

菊 池：お年寄りのことも考えるとトイレは近くにあった方がいいと思います。

ほかに質問ご意見はありますか。なければ先ほど模型を見な

がら説明していただいた件を踏まえて再検討すべきところはして、大まかにこんな感じでよろしいでしょうか。

後 藤：「子ども向け展示室」を2階に上げたということでエレベーターも検討中という話をしていましたが、エレベーターはつけるということですか。

事務局：つけます。

後 藤：子どもさんと親御さんはエレベーターを使って上がっていくという形になりますか？

事務局：そうですね。

後 藤：小さいお子さんだったら1階にあった方がベビーカーもあるので親御さんとしてもありがたいと思うんですが。2階にしたのはスペースの関係でどうしてもということですか？

中 原：ここの管理を考えたときに、この場所に博物館ということの中で地域の活性化ということを地元から強い要望がありまして、2階3階は博物館の部分というような形の中で、1階は管理部分としてある程度遅い時間までというような形を考えているものですから、そうなった場合に講堂などの使用はそういう風に使えるのかなということ。 「子ども向け展示室」は17時以降まで開けている必要性というのを考えたときに、入れ替えた方がいいのではないかと考えました。

菊 池：要するに、子ども向け展示室は17時以降は考えていないと。

中 原：そうです。やはりそんなに遅くまではご利用がないと考えています。

菊 池：わかりました。「子ども向け展示室」というのは改めて考えてみるとやっぱり固いですよね。この展示室がどういうものを想定するかにおいてこれから先実施設計をするときに少し考えた方がいいのかもしれないですね。アメリカのチルドレン・ミュージアムの現状を考えたり、他の地域のところを参考にしながら考えて子ども向けといっても子どもって年齢幅が広いですからみんな一緒ではないと思うので、その辺も含めて実施設計に行くときに、中の構成をどうするのか考えてそれに見合ったメニューにした方がいいのかなと思いました。

では、先ほどの説明として各委員の意見を踏まえて大まかではこれでいくということよろしいでしょうか。

一 同：了。

### 3 議題(2) 常設展示の検討状況について

事務局：(説明)

菊 池：ありがとうございます。それではいまの説明に対してのご意見ご質問ありましたらお願いいたします。

関：いまのご説明で自由動線ということで、たぶん興味があるエリアから見ていくという形になると思うんですけれども、ある程度の動線を示すと

というお話があったんですが、やはり博物館側から「こういう展示ストーリーで見ていただいた方がいい」ということを示しているということでしょうか？

事務局：事前にお送りしております基本設計図書のP21・22「展示室概要」の細かいものをご覧頂ければと思いますが、前室から入りましてまずこれが強制動線として入って左側を向いて、「お城のあるまち」の方にまず入っていただくことを想定しています。「お城のあるまち」をジオラマを中心にグルッとご覧になっていただいて、図面左側の更新をしていくエリアをご覧いただくんですが、前室からまた出て体感をしていくという流れになりますのでP22の常設展示の平面図で申しあげますと下側の方に、「開かれた盆地」「変わりゆく社会」「生きる力」「伝えてきた心」「継いでつなげて」という具合に下から左に回って時計回りで出ていくというような形の動線を基本的に想定しています。自由動線ではあるんですが、なるべくこの動線が何となく感じとれるように、例えば、いま大テーマの問いかけサインというのが正方形で書かれているんですが、その設置の仕方を確認しながらゆるやかに人の流れを向けていく工夫を何かできないかと設計JVともいま相談しております。

関：見る方はこちらの意図を、ここまで全く予備知識なしで見ていくと思うので、例えば、各テーマの象徴というようなものが出ていればそれを見ていって動線になるという形であればそれでいいなと思いました。

それからもう1点ですが、ひと通り見ると常設展示の中でおおよそどのくらいの時間の中で見て回れるかとか、その辺の設定は何かございますか？例えば、「じっくり見る」「概略的に見る」「かけ足で見る」と3パターンぐらいですと時間が示せるのであれば、観光で立ち寄った方もおおよその目途がつくというか、「中を見るのには何分ぐらいかかりますか？」と私もよく聞かれますので。お客さまの関心度によって滞在時間は違ってくるのかもしれませんが、ある程度の目安が示せればと思いますがいかがでしょうか。

事務局：率直に申しまして、各中テーマごとに担当で練りあげているという形で、全体を通してどのくらいの時間かというところまで検討できていません。いま関先生からもお話があったようなところで、例えば、九州国立博物館が確かこのダイジェスト動線が示されているという事例も見ております。この中で、市民の方にも当然見ていただきますが、立ち寄られた観光客の方は時間で動いていらっしゃったりしますので、例えば「こういう回り方をするとこれぐらい時間がかかります」ということを今後詰めていこうと思います。

関：時間プラス「最低ここはぜひご覧いただきたい」という表示があれば、まず1回来てリピーターとしてじっくり見るということに繋がると思

いますので、ご検討をお願いしたいと思います。

事務局：はい、ありがとうございます。

菊池：ほかにはございませんか。

笹本：展示を次々と変えていくには天井をある程度閉めた方がいいということ  
で箱型になっているんですけど、こうやって見ると箱型にすることによ  
ってみんな同じような感じになってしまっていて特徴が出にくくなってい  
る。四角いような部屋がいくつか並んでいるようなイメージになってしま  
って、いま関さんが言われたような、どこを見て欲しいかによって面積  
が変わってくるかと思うので、可動式の間仕切りで少しずつ面積を変  
えていくのか、それともいまのように最初から面積を確定してしまうか  
によっても違ってくると思います。最終的には学芸員さんたちが何を主  
張したいのか、ここに書いてあることは全てが同等レベルなのか、その  
辺をある程度示しておかないと面積のことは一番大きなことになる  
という感想です。

菊池：よろしいですか。展示室の配置なんですけど、基本的に四角い箱の中に展  
示していく形をとりましたが、自由に見てもらうことを前提にしながら  
実は出入口が同じところなんですよね。ということは前室から入ってず  
っと左回りに回ってもう一回戻ってこなきゃいけないです。自由動線と  
いいながら強制動線になるんじゃないかと思います。

それから、さっきの後藤先生からご指摘があったように、ここで避難  
するときはどうするんだろうと、展示室からどうやって逃げようかと。  
特に今度は壁付の展示台じゃなくて床に置かれると地震のときに動い  
て逃げられなくなるということも考えなきゃいけないと思うので展示  
台と床をどうするか頭の中に入れてこれから作って欲しいなと思い  
ました。例えばP21の、「温泉に集う」「街道のにぎわい」の展示台は  
通路側に置かれますね。これを動かないように固定できるのか、あるい  
は動いた方が資料にとっては安全だけれども人にとっては動く逃げ  
られないのでそこのところは少し考えて。それから出口は変えられな  
いですよね。

事務局：そうですね。

菊池：出入口がいまこういう形であるがために、人の動きがある程度規制され  
てしまいます。もう少し早めに気付いたらよかったかもしれなかったで  
すが。

笹本：これから松本に地震がいつ起こってもおかしくない状況で展示ケースを  
どのぐらいの震度に耐えられるように取付けをするのか教えてください。

事務局：固定の仕方については、まだ設計JVとも話をしているんですけど、例  
えば間仕切りの固定の仕方についてはダボ穴のようなところに差して固

定していくようなことを検討していたことはあります。ただ、そのときにまさに先生がいまおっしゃっていただいたような、どのぐらいの地震でそれが外れたり動いてしまうのかという安全面に関するところまでの検討は、申しわけありませんが足りていなかったところですので、そこは考えていかなければいけないと思います。

菊 池：笹本先生からいま指摘があったように安全面はとても大切なことなので早めに検討していった方がいいと思います。

後 藤：真ん中の通路なんですけどこれは幅が360の予定ですよね。

事務局：380ですかね。あとの方でユニバーサルの関係で出てくるんですが、車椅子の関係で、通路の真ん中にいくつかがものが出ていますが、あまり置き過ぎない方がいいんじゃないかなと思うので、その辺のところは検討されたらどうかと思います。

菊 池：そうですね。あまり置き過ぎると消防法で通路として足りないという指摘が出るかもしれません。

それともう1つなんですけど、先ほど壁を可動式にするということでしたけれども壁がどのラインにくるのかということをごきちんと把握して調光のラインのスイッチを対応できるようにしておいた方がいいと思います。展示替えを頻繁にやるところは細かくしておいた方がいいかなという気はしています。

後 藤：ライティングの問題で展示の内容が変わってくるので、後になってこんな筈じゃなかったという風にならないようにいまのうちから対応できる方策をしておいた方がいいと思います。

事務局：はい。

後 藤：面積じゃなくて高さの問題だと思いますが、入って来たとき四角い箱に囲まれたことによって何を見てももらいたいのか分からないことがあるので、入って来たときに目立って、なおかつ、これを見て欲しいようなものは何ですか？

事務局：いまの段階で、出ているものというお答えの仕方になってしまうといけないんですが、それだとやはり「伝えてきた心一人々祈りのかたち」の宝船が高さから言っても帆の部分が衝立の上に飛び出して見えるということなので目につくと思います。

ただ、平面的に置くということばかりになってしまうので立体的にどう見ていただくかという視点ではもう少し考えます。

後 藤：せっかく天井を付けず高さを自由に使えるとなると展示の中でそれを上手く活用していかないと、そしてそれを最初から考えておかないと後からではどうしようもなくなるので。

菊 池：常設展示室には天井がないのでライティングは屋根からぶら下げる形になるんですか？

稲 垣：上からダイレクトに吊るすか枠のようなものを設けるかというのは意匠的な空間づくりも含めて考えた方がいいんじゃないかと検討しております。

菊 池：枠的なもの、天井からぶら下げるにしても東日本大震災の時に烏山の山根会館の天井の照明が落ちたケースがあるので、軽い照明であっても固定の仕方を少し検討した方がいいと思います。それから天井が高いとライトが切れたときの交換が大変です。

もう1つ、箱型の展示室は900の間隔を取ったんですが、そのときはセンターに広場的なものを想定してそこから順に入ってくるということだったので、このように横に線で流れていく構造と少し考え方が違っていたのでまだよかったのかもしれませんが、今回はそうではないのでそこをどうやるのか更に工夫をして欲しいと思います。

ほかにはいかがでしょうか。

笹 本：うちの館は予算の関係で全館燻蒸ができないために差支えが出てきているという実情があるので、特にこの場合天井がないものですから、今後の全館燻蒸やメンテナンスはどういう風に意識していますか？

事務局：いまの段階では引っ越しをしてこの館から資料を運び入れるときに、すべてのものをひと通り燻蒸をかけていくということと、向こうの館で運営をしているときに寄贈で受け入れた資料を一時保管庫で燻蒸するというのを考えています。考えていたのはここまでで、例えば一定の年数などでいま展示してある資料の空間全体の燻蒸をかけていくというところまで考えていませんでした。

笹 本：さっき言ったように、うちは元々は全館燻蒸をきちんとやっていたんですが全館燻蒸ができなくなった途端に常設展示の中から虫が出てきたということがありました。

菊 池：今度作る博物館の建物の中に燻蒸室を作る予定はありますか？

事務局：燻蒸室という形では考えていません。一時保管庫の中にいまやっているような仮設テントのようなものを作ってそこでかけていくということです。

菊 池：そうすると一時保管庫の設置場所を考えないと危ないです。漏らさずにいかに包み込むかを考えないといけないですから人から離れたところに確保できるかどうか。

それから全館燻蒸ですが、フロンガス廃止のときを境にIPMの方針で対処療法で燻蒸するということになってしまったので、そのために毎年ついていた予算を外したら復活できなくなりました。予算はやらなくなったら削られるので予算化したらその予算がなくならないようにやっていかないと。

笹 本：特に今回は新たにいいものを作ろうとしているときに、どんな風に展示

品を保存していくかということが問題になってくるので、本当にいまのようなやり方でいいのかどうかという気はします。

菊池：たぶん環境保全ではいまのやり方がいいと思いますが、財政を取るためにはベストな選択肢ではないのかもしれないということですね。

ほかにありますか。

では、いまの意見を踏まえ更に検討していただきたいと思います。だいたいこんな感じで進めているということでしょうか。

一同：了。

### 3 議題(3) 常設展示以外の検討状況について

事務局：(説明)

笹本：子どものコーナーなんですけれども、小さい子どもから小学校高学年までというのは幅が広すぎて焦点が定まらなくなってしまうのではないのでしょうか。本来の常設展は何歳ぐらいからなのかということ意識して何のためにあるのかを考えた方がいいと思います。私も小学校低学年くらいを対象にした子どものコーナーを作ろうと思っています。子どもたちが遊びに来てくれてそれが癖になって博物館が好きになってくれたらいいと思っています。そういった面では幅があり過ぎることはよくないんじゃないかと思っています。

2点目は、「ようこそ松本」の什器で松本の形というところのアイデアはいいと思うけれど一方で実際に使う側からすれば使いにくいのでしょうか。

3点目はデジタルサイネージのコンテンツは誰が作り込むのでしょうか。とりあえずいま3点質問します。

事務局：まず子ども向け展示の幅が広いというご指摘ですが、当初常設展示が小学校高学年以上が理解できるものということで、その下の低学年までを想定しておりました。下の年代を3歳以上ということで幅をある程度区切ってはいたんですが、先日視察にいきました東京の国立科学博物館ではその年代は保育園や学校があって平日の利用がほとんどないというお話をいただきました。その年齢に限ることで平日利用者が少なくなるのを避けた方がいいのではないかと検討いたしまして、まずは幅広い年代で利用していただき、当然乳幼児と小学5・6年生と一緒に活動することで危険性も高まってくることも想定しています。その辺りは必ず保護者同伴で入るルールであったり、はしゃぐものを多く作らないというような運用で何とか解決できればと考えていますが設計者ともその辺りを検討して進めていきたいと考えています。

続きまして、「ようこそ松本」の什器が合併地区の形になっているということにつきましては確かに使いづらい部分があるということ、什器

をその形にしてお客さまに対して何か伝わるかということをもう一度検討していきたいと考えております。別刷りのA4資料で写真を載せておりますが、ある程度定まった形の方が汎用性もありお客さまにとっても見やすい部分があると感じておりますので、今後設計者と進めていきます。

最後のデジタルサイネージの更新・データ作成につきましては、いまこのデジタルサイネージは松本駅前の自由通路及びイオンモール松本店に入っているものと同じものを入れようと考えております。その2点につきましてはテレビ松本さんがデータを作成し設置したものでございます。テレビ松本さんで市の報道発表・ホームページなどを独自にチェックしながら情報は常に更新しております。ですのでそこに一括で設置から更新までお願いすることで情報の更新が図れるのではないかと考えております。

笹本：サイネージの部分だけけれども、だったら博物館に行く必要がないと思いますので博物館らしさは何を考えているのか。そこが問題になってくると思います。

事務局：テレビ松本さんの方では、例えば、駅前とイオンモール松本店では同じ情報以外にもそれぞれ独自の情報も載せております。ですので博物館として例えば、「まると博物館」の情報であったり全館のイベント情報などを新たに番組を作って流すよう依頼する中で博物館独自の情報も同じコンテンツで流せると考えております。

笹本：いまの部分で、一番伝えたい学芸員さんたちがやれるレベルのものを用意した方がよくて、業者に任せるとお金が掛かるものだし更新頻度だとか言いたいことも間接的にしか伝わってこない、逆に難しいことをやるのではなくて如何にして効率的になおかつ中にいる人たちがやれるかという方策を考えた方がいいと思います。

後藤：いまので松本駅にあるのはなかなか面白くて利用のし甲斐があります。観光客だったらあれで情報を取りたいと思うのでその視点で観光客サービスとしてはあってもいいかなと。

笹本：以前から言っている通り本来博物館は市民用であって、例えば、さっきので言うと、「ようこそ松本」にしても合併して私たちはこれだけ増えたんだと市民が理解する。どちらかというとなかまの、そういう意図が全部あるわけですね。そうすると博物館は何の意図でデジタルサイネージをしなければいけないのか、学芸員たちは何をメッセージとして伝えなければいけないのかということを考えていただくために敢えて学芸員さんたちがやれる体制を取った方が楽だと。学芸員さんたちの側からすると自己主張を入れてやるためには任せない方がいいというのが私の考えです。

後 藤：ただ持ってきて置くだけじゃなくて主体性を持ってやりなさいと。

笹 本：そうです。

菊 池：よろしいですか。この手のものは博物館を作るときに毎回話題になるんですが、展示替えができることと映像を使いたがるんですけれども、一番ネックになるのは同じものを長年流し続けるわけにはいかないことなんです。そうすると無償で誰かが提供してくれるのを待つわけにはいかないと思います。笹本先生がおっしゃったように学芸員・館が意図を持って作っていかなければいけないと思います。そうするとその製作費は誰が担保してくれるのか。それが取れないと飽きられてしまうというのが出てくると思います。やるのであればそこまで含めて考えて欲しいです。作ったけれど新しくなりませんということでは情報になりません。それは展示室の展示替えでも同じで、ものを置き換えただけでは気が付かないので、分かるような展示替えができる道具が欲しいんですけれども簡単にそれができるかどうか。そうでなくても新しい松本市立博物館は展示を10年単位で考えていますよね。そういうことも考慮しながらどう更新していくのか。お金を残しておいてそのときに使うわけにはいかないでしょうから。いまも面白いとは思いますがどこに現実味があるのかというところで少し検討して欲しいと思います。

中 原：テレビ松本さんのサイネージはサイネージとして防災情報とかそういうものが多く流れているものですから、そういうものはそれで設置していきたいと考えています。

その他のサイネージについても、検討しておりまして自由に職員が作ってアップしていけるシステムになっているものですから、そういうものは告知用に設置を掛けたいと思います。

笹 本：みんな同じじゃなくてデジタルサイネージの中にどういう風に色が出てくるかが大事だと思います。いかに効率的になおかつ学芸員さんたちに主体性を持たせるということをいまのうちから考えておかないと。

菊 池：もしかしたら映像担当の学芸員さんを確保しておかなければいけないかもしれないですね。

中 原：モバイルで撮ったものがすぐに載せられるような時代になっていますので、それはしっかりチェックしておかなければいけないですね。

笹 本：博物館にはどんな学芸員が必要なのかという視点で、例えば展示をするためにはどういうライティングをするのかという展示専門の、それから広報だったら誰がどういうことができるというようなことを意識しておかないとそろそろまずいだろうと。そういう意味で保存処理、保存の専門は誰がやるのかとか、内部で時代別の話だけではなくて学芸員さんたちの役割ですね。人数は限られてくるので、「私はこの部分を担うからここを勉強するのであなたはこっち」というような目配りをしておい

た方がいいと思います。

菊 池：それから「子ども向け展示室」の絵を見ていて、3・4歳から小学校低学年という年齢になってくると傾斜のあるものはおっしゃっていたように3・4歳の子どもには危ないと思います。子どもの身長と比較すると2・3倍あるんじゃないかと、そのところも工夫して、できるだけ高いものではなく平面でできるものが一番いいんじゃないかと説明をうかがいながら思いました。

後 藤：P18のところに絵が描いてありますが、檻の中で遊ばされているというかそんなイメージが湧いてきたんですけれども、こういう風にした意図があるんですか？

事務局：この設計の案としては、イコール賑わいというわけではないですが子どもの笑い声や遊んでいる声が聴こえてきて、囲わずに遊んでいる様子が見えやすいようなデザインを考えました。

後 藤：枠の中から子どもたちが手を出したりするのがいいなと考えているんですか。ガラスを張られてしまうんですか？

事務局：ガラスを張らないと外へものを落としてしまうので、考え方としましては外から中の活動が見えるような部屋にしたいです。

菊 池：いい案だとは思いますが、安全面を考えるとエントランスのガラスの壁に子どもが激突した例が何件かあります。やっぱり透明というのは中は見えますが、そこにあることに気が付かないということがあるので、中で遊べるのであれば余計にその心配が出てきますが、当然これから考えていくんだと思いますので。

笹 本：「どきどき山」が気になってドキドキしちゃうんだけれども、小さい子どもも一緒にいるとなると安全ではないと思うけれど。

事務局：そうですね。「どきどき山」につきましてはこの絵ですと、大人もくぐれるぐらいの高さになっていますのでかなり高い想定になっています。実は建築の方の指摘もありまして、これだけの高さのものを2階に置くと山の頂上は3階扱いになるということもありまして、ここにつきましてはそういったことも含めて抜本的に検討を進めて参ります。

菊 池：ぜひ安全面を重視してください。

後 藤：ただの山じゃなくて登っていったら美ヶ原の頂上に着いたっていうのはどうでしょう？

事務局：面白いですね。もしやるのであれば松本らしさを出したいです。

菊 池：傾斜がちょっと気になるんですけれども。

櫻 井：さっき団体可ということで、学校の見学で入ったら一般の方々は入れないのでしょうか？

事務局：運用についてはこれからですが、例えば、ひとクラス2～30名が入ると他が入るスペースはないと思います。なのでそういった場合は事前予

約という形にさせていただいて1階の入口部分に、「〇時から〇時まで〇〇小学校〇年生」というような予約表を掲示してトラブルがないよう運用を進めていく形になるかと考えています。

櫻 井：一般利用のときに高学年までということでしたが、高学年も保護者同伴ですか？

事務局：全部です。

櫻 井：入口に誰か立っていて。

事務局：スタッフや道具を片付ける係が必要になると思います。例えば、国立科学博物館では大人1人に対して子ども5人まで一緒に入れて、その代わり子どもだけでは絶対にダメというルールがあるそうです。

櫻 井：責任を持ってくれる人と必ず一緒にいくということで、安全面も責任を持ってもらうという感じになるということですね。

事務局：入室前に親子に対して危険性や遊具の使い方を説明してから入っていただくというような運用をしておりましたのでそれを参考にしたいと思っています。

櫻 井：靴を脱いで？

事務局：はい。

櫻 井：そうすると靴下でも滑らないような素材ということを考えていますか。

事務局：そうですね。転ぶことを前提に考えた床になるかと思っています。

櫻 井：そうすると、「どきどき山」みたいな傾斜は滑って危ないということになりますね。またいろいろな面白いことをお考えだと思いますが、昔の遊びとか、「なりきりアイテム」の中には鎧を着ているとか松本らしさを出したアイテムを考えていくということを希望します。

事務局：はい。

菊 池：ほかにございますか？

先ほど後藤先生から発言があったときに「子ども向け展示室」は木の棧だけではなくてガラス、考え直すと言っていましたけれどもガラスで壁が作られるとすれば暑くなってしまいます。空調とかこういうことも考えなければいけないかと思っています。

櫻 井：地震があったときを考えるとガラスは危ないと思います。

関：「子ども向け展示室」は先ほどのご説明ですと、基本的には園児さんの団体の使用も想定ということですか？確認ですがこれは小学校も団体利用も検討するということですか？

事務局：はい。

関：そうすると、前回まである程度小学校での団体の見学というのは松本市の場合ですと違うところでも学習機会があるので、博物館の方では特に対応は検討していなかったということでしたが、大きく方針を変えられたのでしょうか。

事務局：平日は利用が上らないということで運用面を考えると小学生に来ていただいで楽しんでいただければと思います。そのためには幅広い年代が使えるようなコンテンツを今後考えていて、1つのコンテンツが全年齢に対応するというのは難しいかと思しますので、どの年齢向けというような発育段階を考慮しながらこれからコンテンツを検討していきたいと思います。

関：細かい資料P25もありますけど、例えば、小学生の場合で学習にくるということであれば各授業単元の学習の中での利用ということになると思いますので、その目的が展示室内を使った何か社会科の学習であるのか地域の歴史を探る総合的な学習であるのかということと「子ども向け展示室」の目的が合うのかということと、場合によっては今回は展示室を学習として、例えば、学芸員さんが説明する中で展示を見て学んでいただく、その部分がお家の方と別の機会に来てくださいと御案内できるのかなと思いますけれども、ここの利用も含めてすべて広く利用を募るということはどうでしょうか。

事務局：例えば、総合的な学習で、「むかしの暮らし」というと4・5年生があるのかなと思います。それについては常設展示の方の体験コーナーだったり展示の方で理解していただけるような内容にはします。ただ、せっかくこのコーナーに来て利用できないと禁止するのはなしにしたいと。ですので学校の方で、例えば、見学時間だとか人数に応じてできる条件が整うのであれば使っていただいてもいいかなと思います。推奨するという考え方とは少し違いますが、そんなイメージで想定しています。

笹本：変な言い方ですが用意したからといっても学校は来ません。交通費をどうやって保障してやるのか松本市がどういう風に動くのかによって。今回見てもらうのにも近隣の学校だったら楽ですが、例えば、梓川みたいに遠くからくるのには交通費が掛かります。交通費が掛かるときに何を目的にして来てもらいどんな説明をするのか。オープンにしている使ってもらえばいいというレベルだと恐らく困ってしまいます。うちもある意味では競合対象になりますから。限られている予算の中からどういう使い方になるのか。

うちの場合で言うと県庁に来たときに寄ってもらおうとか、サイトウキネンのときがセットなんです。ですからそういう状況でやると「子ども向け展示室」もしっかりと焦点を当てないと何となくというのが一番使いにくくて、幅があるというのはそれだけ対応ができないということになるから、その辺は注意した方がいいと思います。

事務局：はい。

菊池：ほかにございますか。

後藤：「のんびり温泉」というのはとても松本らしくていいと思いますが、何

をしてもらうんですか？ P 2 3 の絵を見ると、「わいわいだいら」に丸く座るところがあってそこに什器を持って遊ぶようになっているけど、外向きに座るようになっているので、「のんびり温泉」に什器を持って行って遊びだしたり親子で遊んだりするんじゃないかという気がするので、どういう風に使い分けるのか。「わいわいだいら」は名前のようにフラットな敷物を敷いておいてその上で自由に遊んでもらったり本を開いてもらうようにした方が効率的じゃないかという気がします。

事務局：「のんびり温泉」は中に入っただけのように想定していますのでこの外縁部は空間を仕切る縁のようなイメージで、真っ平らな空間ではなくてちょっと空間にアクセントを持たせるための作りになっています。ただ、いまのご指摘のように、これがあることによって部屋全体が狭くなるようであればワンフロアにすることも検討していかなければいけないと思います。

後 藤：狭くはならないと思います。むしろ、「わいわいだいら」のところに置いてある腰掛をフラットなものにした方が子どもさんが遊びだすと思います。

事務局：そうですね。実はこの色んな形も合併5地区の形を考えているんですけども、再検討します。

後 藤：こだわらなくてもいいですが。

櫻 井：来た人には5地区だという意味が分からないかもしれませんね。

菊 池：ほかにございませんか。

笹 本：直接展示には関係ないですけど確認させてください。いままで子ども中心にやってきていい成果を上げていると思いますが、一番フリーで来るのは年配の方なんです。年配向けには何を意図してあるいは何をサービスしているのか展示の中に一切見えてこないです。本当を言うと一番来て欲しいのは子育て中の親の世代ですが忙しくて時間がない。そうすると子どもと年配者と急に離れちゃうのか、そういう幅の広さをどういう風に展示の中に意識しているのかが、いままでの部分でほとんど触れられていなかったの、ターゲットをきちんと決めていただきたいと思います。

菊 池：それでは3つの議題のうち(1)については出た意見を踏まえて今後検討して欲しいということで原則了解。(2)(3)については現在検討中の課題だということですので今日の質問・意見を考慮して今後も検討を続けて欲しいと思います。

なお、最初に事務局からお話がありましたように、展示構成についてはこれから個別に意見をうかがうということを考えているそうですので、皆さんぜひご協力をお願いいたします。

それでは用意された議題を終わりましたので司会を事務局に戻した

いと思います。よろしくお願いいたします。

事務局：部会長ありがとうございました。これで本日の議題が終了いたしました。  
以上をもちまして第5回専門部会を閉会したいと思います。ご協力ありがとうございました。